

## 書評

岩波新書（1983年10月10日第13刷）

上田 篤 著

## 「日本人とすまい」

評者 阿 曾 伸 一\*  
Shinichi Aso

1973年のオイルショックを契機として、産業用、民生用を問わず、省エネルギー、新エネルギーの技術開発が積極的に促進せられ、こうした努力の結果、今日の石油価格の安定が持たせられたといっても、過言ではない。家電分野、とりわけ家庭のエネルギー消費のかなりの部分を占める給湯・冷暖房機器においても、太陽熱利用機器の開発、熱交換器、コンプレッサーなどの高効率化が進み、この10年の進歩は目覚ましいものがある。一方、国民の意識は、高度情報化社会の到来と共に、大きく変化し、その価値感が多様化してきたといえる。

このような背景において、評者のように民生用エネルギー機器の開発に従事するものにとって、省エネルギーを図りつつ、多様化への対応、すなわち生活感の向上を計るものは何であるかが、第一の関心事であった。これには機器と人とのインターフェースの改善が第一であるが、そのためには、生活の場を支える住居と設備機器のかかわりあいを探ることが必要であり、これは気候、人間などの国情に応じたものでなければならない。

こうした中で出会ったのが本書である。本書は、発刊が1974年といささか古いのが、一読した所、今日においても十分に通じる所があり、敢えて紹介する次第である。

本書は、著者があとがきで記しているように、いくつかの雑誌や新聞に発表したものをまとめたものであり、24の独立した評論（エッセイ）からなっている。各論文は、屋根、壁、床、窓などの生活空間の基本要素ごとに、著者の生活、設計体験、発生論などの歴史的考察、および工学的思考から、本来のあるべき姿を述べたものである。これらのうち、エネルギー、空気調和関連のものは、屋根、壁、戸、窓、障子、床、畳、

天井、二階、屋上、地下、軒下、縁などである。

壁についての記述の中に、「むしろ、冬の寒さを助長するのは、湿気である。京都のジンジンと骨身にこたえる有名な底冷えは、むかし湖があったという山城盆地のもたらす湿気が原因している」という一文があるが、このことをYaglowの有効温度で計算してみると、なるほど気温が10℃以下では、夏季と異なり、湿度の高い方が体感上では寒くなることが確認できる。

このように、本書では数式は一つも紹介されていないが、計算により検証してみると、一つ、一つ納得できるものであり、本書で述べられている知恵（ソフト）の数々が機器開発の一つのヒントとなりうるであろう。

今後、太陽エネルギーでは、パッシブソーラーハウスが、住宅設備システムでは、ホームオートメーションがますます盛んになると予想されるが、こうした分野においても、十分本書はその知恵を提供していると考えられる。

最後に、本文の一節を紹介して、本書の紹介を終えたい。

「なにかといえば、冷暖房や機械換気をもちだしてことたれり、とする技術主義もこまるが、現実の物質的生活には無関心で、政治や人間関係にのみ熱中する人間主義も、どういうものであろうか。いまこの国の住宅に必要なことのひとつは、この日本の風土に、科学技術をマッチさせた、ほんとうに住みよい生活空間の創造をめざして、研究開発をすすめることであらう」

\* 松下電器産業株式会社中央研究所技師  
〒570 守口市八雲中町3-15